

徳島県上勝町

片野修

徳島県上勝町は、人口が1300人足らずの四国一小さな町だが、近年注目されている。その理由は2003年に日本の自治体ではじめてゼロ・ウェイスト宣言を行い、それを基盤に町づくりを推進しているからである。ゼロ・ウェイストとはゴミをゼロにするということであり、そのための仕組みが充実している。ちなみに、私は非常勤講師として環境科学を教えたことがあり、そこで上勝町を知り、先日訪れたしだいである。

ゼロ・ウェイストを達成するために、ゴミは現在45分別されており、町民は自らゼロ・ウェイスト・センターへ持ち込んで、きまったところに置いていく。ゼロ・ウェイスト・センターの管理は、BIG EYE COMPANYという会社が行っている。生ごみは各家庭や店舗において生ゴミ処理機やコンポストで処理され、たい肥として利用されるので、ゼロ・ウェイスト・センターでは受け付けない。町のキャンプ場などを利用する人は、ゼロ・ウェイスト・センターにゴミをもちこむことはできないので、すべてもち帰ってもらうことになる。

45分類されたゴミは、資源化されていく。たとえば、陶磁器やガラスは路盤材に、廃バッテリーは鉛に、スチール缶、乾電池やライターは鉄鋼製品になっていく。それでも資源化されないものは埋め立て処分になるが、その割合は少ない。町のゴミ焼却炉は閉鎖された。



ゼロ・ウェイスト・センター

不要なものをリユースしてほしい場合、町民はそれを「くるくるショップ」にもちこむことができる。ここでは売り買いするのではなく、すべて無料で取引される。ノートに必要な事項を書くだけで、食器、衣類、電池、本などをただで入手できる。ほかに、使えなくなった着物や鯉のぼりをリメイクして、ぬいぐるみ、ポーチ、カバン、洋服などに変える「くるくる工房」があり、オーダーメイドにも応じてくれる。

この町の産業としては「葉っぱビジネス」がある。高級料理店で季節の食物を出すときに



くるくるショップ

添えられる「つまもの」を梅、桜、桃の花、柿、椿の葉っぱなど 320 種類用意し、注文に応じることができる。80 歳を超えるおばあちゃんたちがスマホやタブレットをにらみ、早い者勝ちの受注をとろうと真剣勝負を繰り広げている。このほか、ゆず、すだち、番茶などの農業、地ビールやどぶろくの生産とそれを活用した飲食店や民宿、キャンプ場も魅力的である。コンビニもスーパーもないが、9か所の商店で買い物をすることができ、新鮮な魚も入手することができるほか、欲しいものは取り寄せてもらえる。町内を流れる勝浦川では、アマゴやウグイが釣れるほか、町の産業にしようとウナギも放流している。木工産業も重要な柱であり、第三セクターとして設立された株式会社「もくさん」は、木材、チップ、テント、柵などをつくっているほか、建築や造園業務も行っている。間伐材などの不要木材はバイオマスエネルギーに変えられ、温泉や暖房に利用されている。

町内の宿泊施設はいずれもサステナビリティに配慮したものであり、とくに HOTEL WHY はゼロ・ウェイスト・センターやくるくるショップに隣接しており、ゼロ・ウェイストを体験することができる。客室のソファやカーテンには廃棄物をアップサイクルしたものを利用している。トイレトペーパーは町内の新聞紙などを再生したものを使うなど、この町のリサイクル率は 80%を超えている。農家民宿がいくつもあり、家族で体験するイベントが多い。町を訪れる人のために、サステナブルな工場見学、工房での手作り体験、晩茶の飲み比べなど多くのプログラムが用意されている。

私がコーヒーを飲み立ち寄った RISE & WIN と呼ばれる店は、喫茶店、パブ、量り売りショップ、ブリュワリー、BBQ ガーデンなどを兼ねており、その建材はほとんど廃棄物からできている。隣接した醸造所で地ビールを生産し、それを店で消費しているほか、地元食材を利用した食事を楽しめる。環境にやさしい洗剤やお茶などを量り売りで提供し、サステナブルな商品も販売している。この店はゼロ・ウェイストを象徴するとともに、町民の憩いの場にもなっており、ここで私は、この町や川の魚のこと、ゴミの処理法などについて聞くことができた。

上勝町はゴミだけでなく、住民の福祉も充実している。町民に何か生じたときには、町役場が 24 時間体制で連絡を受け、救急輸送員や医師が対応してくれる。住宅、空き家整備、浄化槽、生ゴミ処理機、太陽光発電、小水力発電などに補助金を利用することができ、移住者は増えている。

つまり一言でいうと、この町はゼロ・ウェイストを出発点として、町民すべてが生き生きと暮らせるコミュニティを目指しているのだ。移住者や新しい産業を推奨しているので、何



RISE & WIN Brewing 地ビールや料理が楽しめる。

かやりたいと思う人は歓迎される。ゴミをリユースしたりリサイクルしたりする事業だけでなく、町の産物を利用する仕事はさまざま考えられるだろう。町民が集まって、好きなことを話す「なんでも発表会」というイベントもある。

どうしてそういうことが可能かということ、コンビニやスーパー、飲食のチェーン店がないからであり、そのぶん個人の商店が活躍することができる。さらに、ゼロ・ウェイストと環境問題に関心のある人たちが町を訪れて、リユース、リサイクルされたものを買ったり、地産の食料や料理を味わったりする。

新しいコミュニティというと、井上ひさしの『吉里吉里人』や宗田理の『ぼくらの七日間戦争』など、これまでの体制を否定して対立し、独立する話がほとんどである。自分の理想郷あるいはパラレル・ワールドとして別世界が描かれることもあり、村上春樹の『街と那不確かな壁』など多くの作品があるが、こちらは現実世界との接点が希薄である。その点で、上勝町の挑戦は、地に足をつけた形で独自のコミュニティを発達させることに成功した。さらに、ゴミをなくすだけでなく、地球を汚さず地球環境をよくするために、世界中に仲間をつくることを目標にしており、決して孤立しているわけではない。ゼロ・ウェイストを掲げる市町村としては、ほかにも奈良県斑鳩町、熊本県水俣市、福岡県大木町が挙げられる。小さな町でも、これだけのことができるということに感嘆するばかりである。

日本の小さな町や村は、人口減少と高齢化に悩まされている。農林水産業に依存し、保守的な風土と伝統の重視が特徴的だが、それだけでは若者は出ていくだけであり、移住者もや

ってこない。新しい価値観と産業を考えて、特色あるコミュニティを生み出すことによってこそ、その活性化はもたらされるのではなかろうか。大きなスーパーやコンビニが撤退したという話をよく聞くが、それを嘆くのではなく好機と考える発想の転換が必要である。

上勝町でも、人間どうしのトラブルや問題点もあると思うけれども、自分だけ大儲けしようと企む人はいないように感じられる。小さな町で大儲けすることなど、そもそもありえないからだ。一方で、現代社会では企業同士の競争においても、組織内での出世争いでも、他者を貶めて儲けたり勝ち残ろうとしたりする。上勝町では、そういうものから離れて、それぞれが自立して、自分の好きなことをしながら、町の環境を守る。その姿勢が研修や観光のために訪れる人を増やし、さらに町を活性化する。今後、上勝町がどう発展していくのか、目が離せない。